

インクルーシブ野外教育実践における体験児童及び重要な他者への効果

—アダプテッド・スキー教室における一事例からの考察—

加藤彩乃（信州大学）

キーワード：インクルーシブ教育、野外教育、アダプテッド・スポーツ

1. 背景と目的

昨今教育現場では、多様な子どもたちが共に学ぶ「インクルーシブ教育」の推進や、野外活動をはじめとする「体験学習の充実」が求められている。しかし、障害のある子どもと障害のない子どもが共に野外で学ぶ場面(以下、インクルーシブ野外教育)においては、専門知識や指導技術を持つ人材の不足や、プログラムの不足などから、障害のある子どもが見学することや別プログラム対応にならざるを得ない状況も少なくない。

長野県では、「人の手」と「専門機材」、「アイデア」を活用した『信州型ユニバーサルツーリズム』が推進され、令和2年度より、インクルーシブ野外活動指導員の養成が行われるなど、自然を活用した学習環境の体制整備が進められている。

本研究では、積極的なインクルーシブ野外教育実施のための環境整備に向けた資料を得るため、インクルーシブスキー教室実施校を一事例とし、支援対象児童および周囲児童、教員、保護者への各効果について明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

2-1. 対象

202X年に実施された県内スキー教室のうち、調査協力の得られたA小学校低学年スキー教室を対象とした。そのうち、参加のための配慮が必要な、障害のある児童(以下、対象児)1名に対して、アダプテッド・スキー^{※1}を実施し、対象児および対象児と共にスキーを実施する児童(以下、周辺児童)、対象児の保護者や担任(以下、重要な他者^{※2})を、効果検証の対象範囲とした。

2-2. アダプテッド・スキーの実施方法

対象児へのアダプテッドの方法決定および当日の指導は、A小学校および対象児とその保護者との事前打合せのもと、アダプテッド・スキーの指導実績(13年)のある指導者Jが行った。

2-3. 調査項目及び分析方法

対象児および周辺児童には、「活動に対する意欲」と「相互作用の有無とその内容」について、事前学習時およびスキー実習当日のビデオ撮影および参与観察にて行動を記録した。また、対象児の重要な他者には、「対象児の普段の様子」「インクルーシブ野外学習に対する考え」について実施前後に聞き取りをし、その内容を対象ごとに整理した。

これらの記録をもとに、アダプテッド・スキー実施

による対象児のスキー学習に対する意欲の変化と、インクルーシブスキー教室実施による周辺児童および重要な他者への影響について考察した。なお分析については、指導者Jと共に解釈を共有確認した。

3. 結果と考察

各対象児について、以下のような変化が見られた。

【対象児】活動意欲はあるが不安から、気を逸らす言葉を発する状態から、「自分でスキーができる楽しさ」や「自信」を獲得し、繰り返し挑戦する状態へ移行。「担任や周辺児童にも見てほしい」という思いが出現。

【周辺児童】対象児のスキー実施姿への着目(声かけや手を振る仕草など)と、「自分も滑ってみたい」という意欲が出現。

【重要な他者】「難しいのではないか」「できる範囲で」という考えから、対象児の意欲の高まりを実感することで、「こんなにもできるのか」という思いに移行。それに伴い、対象児への関わり方や言葉かけが変化。

以上のことから、アダプテッド・スキーの実施は、対象児の前向きなスキー参加を可能にし、対象児の活動意欲を向上させ、その姿は周辺児童および重要な他者の児童に対する考え方や関わり方にポジティブな影響を与えることが考えられた。

4. 今後の展望

本研究の成果を踏まえ、今後は調査校や実施プログラムを増やし、インクルーシブ野外教育に共通する効果を明らかにするとともに、より効果的な指導が実践できる指導者育成へ繋げていく必要がある。

本研究は、信州大学研究推進事業の支援を受けて実施されました。

※1 アダプテッド・スキーとは、個人の障害の状態や運動能力に応じて、スキー用具や指導方法を個人に適応させた(アダプテッド)スキー実践のことを示す。個人にアダプトさせることで、友人と共にスキー教室に参加し学ぶこと(インクルーシブスキー教室)が可能となる。

※2 障害のある子どもにとって、保護者や教員は、子どもの行動選択や意思決定の幅に影響を与える存在、「重要な他者」と言われている。障害のある子どもの学習参加そのものや、その方法にも影響があると考えられるため対象とした。

参考文献

矢部京之助(1997), アダプテッド・スポーツの提言. ノーマライゼーション. 12, 17-19.